

博物館教育

— 展示品の解説 —

Museum Education — Explanation of the Exhibition in Natural History Museum —

上 野 八 恵*
Yae UENO

1. はじめに

博物館における教育的試みには、講演会、講習会、観察会、見学会、映画会、展示品の解説、展示室講話と多くの催しがなされているが、この中でも展示品の解説、展示室講話は、毎日、博物館に入館して来る様々な多くの人々に直接接近して展示品と入館者を結びつけ学習の効果をあげる役割を荷担し、一般大衆の人々の心、考え方や要求、知識の程度などを把握する極めて重要な仕事である。しかしこの仕事は、一見何事もない易しい仕事のように見えて、実際に行うとこれ程難しい仕事も少ない。もし博物館で一番難しい仕事は何か?と聞かれたら筆者はこの展示品の解説を筆頭にあげるだろう。

たゞ展示されている単品の学術的説明ならばパネルやオーディオ機器で十分間に合う。しかし来館者の中には文字の読めない人達も中には居るし、また質問したい人達もたくさん居る。また来館した人達全部が必ずしも自然科学に深い興味を持った積極的な学習者ばかりとは限らない。更に学校教育のように一定の年令の児童生徒を一つの目標のカリキュラムのもとに指導する学校教育とも異っている。未就学児から成人まであらゆる異った職業や考え方、知識を持った人達が百人百様の要求をもって入館して来ているのである。

こう云った人々を対象に展示資料との結びつけを行い、展示品を通して思想の展開や、生命や地球の進化の歴史

的展を行わねばならない。このためには、展示品についての学術的知識や研究を持っていなければならないばかりではなく、入館して来る多くの人々についての人間的知識を持ち研究がなされなければならない。

展示資料と人々を結びつける場合でも、年間事業を企画する時のように、入館者統計や資料アンケートをもとに、じっくり考え込んで多くの研究者や専門家を集めて討議して決めるのではなく、百人百様の入館者の学習目的や要求を即時に見抜き分析して学習の糸口を引出し、どのような話を展開して行くか?を即決して学習をリードして行く鋭い感覚とひらめきと指導力を持った人でなければならない。

そのためには、人に接する対人関係の要素、相手の関心を引出して興味を持たせる心理学的要素、高度の専門的、学術的知識を相手にわかり易く話す話術や教育学的要素、解説者自身の巾広い見聞や教養、更に展示資料における専門的な深い知識、これらが複雑にからみ合って微妙な極めて難度の高い要求がなされるからである。

そしてこれら諸条件の中には生得的なものも有って、後天的に指導や訓練を行っても、必ずしも皆が出来るように上達するとは云難い点がある。一人の優れた解説者を養成することは極めて困難な事である。今後は特に海外における展示や解説、外国人の入館の多い博物館における展示解説では、語学力や国際感覚、比較文化

* うえのやえ

〒332 埼玉県川口市金山町8-2-26

的知識等も要求されて来るので増々難しくなる一方である。しかしその反面、展示品の解説や展示室講話程、教育効果が上り、展示品を通して入館者と解説者（博物館）との心が通い、真の喜びを分かち合える仕事も少ない。とにかく収蔵庫のイメージの強い博物館にとって有一の晴やかな明るい活動面であり玄関口と云っても過言ではない。この困難な展示品解説の要領が何処に有り、またどうすれば優れた解説者になれるか、その要領や解説者に求められるところの資質等について、かつて筆者が国立科学博物館在職中に展示品の解説および展示室講話を行った体験を基にして記して見たいと思う。

2. 対人関係の面からの要点

A. プラスαの印象を与えよ

展示品の解説や展示室講話を行う学芸員は入館して来た人に一番最初に接する博物館の仕事の玄関口であるため、良くも悪しくも博物館の印象を強く与えるものである。そのため正しい接客のマナーを身につけ、服装も人柄も来館者の指導者として好ましい印象を与えるものでなければならない。また入館して来た人々が、展示品や会場などについて気軽にたづねたり、質問したり出来る親しみ易い親切な人柄と明るい清潔な雰囲気を持っているよう気を配り心掛けねばならない。更に入館して来た1人1人が何をしよう何を学ぼうとして入って来たのか相手の要求を素早く見抜く鋭い洞察力を持っていて適切な案内や指導が出来なければならない。

このように展示品についての学習に入る前に、人間性の面で人に対して好感を与え、親まれるプラスαなる要素や人格が要求される。

3. 教育面からの要点

A. 指導のポイントや学習の糸口をつかめ

——一ヶ所でのよいので強い感銘を与えるような学習を行なえ——

博物館に入ってきた人達が何を学ぼうとして来館したのか？を素早く見抜き適切な案内や指導をなさねばならぬ事は言うまでもない事であるが、自然史博物館に來ているのであるから生命の進化や地層、地球の生成、天体や宇宙について学習する目的で入館している事には間違いない。しかしこれら生命の進化や地球の生成について学習させるにしても、あまりにも長大、広大過ぎて2時間や3時間は直ぐに費してしまう。したがって解説学芸員は入館者から要領よく学習の要点を聞き出し（引出し）そこを中心に話を展開して行く事が、短かい入館時間を

有効に効果的な学習をさせる要領である。そして又入館して来た人達全員が必ずしも詳細なはっきりした学習目的を持って入って来ているとは限らない。たゞ子供の伴をして入館したお母さん達や、たゞ漫然と散歩方々入って来たおじさん／＼こう云った人達にも自然科学に対する興味や関心を持たせるような学習の機会を与えなければならない。このような人達には解説学芸員の方から積極的に話しかけて、その人達がどのような点に興味を持っているか？また、どのような視野から話しかければ興味や関心が開けて来るか？などをよく見極めてその指導のポイントをつかみ展開して行く事が肝要である。

例えば子供の伴をして入館して来たお母さんが居て、子供達は勝手に自分達で見学している場合を想定して見よう。とかくお母さん達にとって、子供と一緒に学ぼうとする気は有っても一人で学ぶには「自然科学は難しい／＼」と云う気持もある人が多いので――。

学芸員 自然科学について御興味お持ちですか？
お母さん えゝ、あまり知らないんですよ／＼学校で習っただけで――。

学芸員 あゝそうですか？しかし自然科学や生物学、生命科学はそんなに難かしく考えるべきものではなく、極く身近な身の事柄なんですよ。例えばこゝに生命の進化の展示がなされていますが、生命が地球上に現れたのは約10億年程前、イヤもっとそれ以前の事と云われています……………。

と云って生命の発生について話すために古生代の展示のところに案内する。

最初は一ヶの細胞、コアセルヴェートのようなものに過ぎなかった生命が分裂や増殖を重ねてアミーバーのような生物になったのですよ。そして最初の生命は水中、それも海の中に発生したと云われていて、海は全ての生命の母体なんですよ。それで現在でも生命の発生、胚の発生には、動物でも植物でも水の有るところにしか発生しないでしょう？人間も最初はお母さんのお腹の中で羊水に浮いているでせう？あれは原始生命が海水中に発生したのと同じ原理ですよ。そして人間も1ヶの卵細胞と精子の結合による単細胞生命から始まり、幾多の分裂を繰り返して次第に成長して行くのですよ。

丁度体内で胚に脊椎が出来る頃が、この

地上での進化の過程でいえば約4億年位前の無脊椎動物から脊椎動物(魚類)に進化した頃に相当するのです。この頃の胎児には人でも魚と同様にエラ蓋の痕跡さえ見られると云われています。また、胎児に手足の区別がはっきりとして来る頃は丁度約3億年位昔の魚類から両棲類の進化の時期に相当するのですよ。そして10ヶ月間お母さんのお腹の中に居る中にこの地上で行なわれた6億年にわたる生命の進化の全過程、——単細胞から人間までの進化の過程——を繰返して1人の人間として生れて来るのです。したがって初期の胚は魚でもカエルでもニワトリでもブタでも同じような外観で見分けが付きませんが、日がたつにつれて人としての特徴が現われて来るのです。

と話しを展開すれば程んどのお母さんは、自分の内なる自然(かつて自分の体内で起きた現象)と外なる自然(生命の発生、進化の6億年にわたる地球上での現象)の一致に気付いて驚異の念をもって初めて生命の不思議さ、神秘さに打たれ、大感動で生命の進化の話を興味深く聞き入られる人達ばかりであった。

このようにして「個体発生が系統発生を繰返す」と云う生命科学の一大法則であるヘッケルの法則を大感動の中に学習させる事が出来、この事を基により詳しい生命進化についての学習の展開が出来た。

第2例として：婦人層や、小、中学生の中には、地球は大古から未来に向って変動進化しているものであり、現在の地球の諸現象もその一過程である。と云う基本的概念や認識を持って居ない人が多く“自然は大古から現在自分達が見ている自然、即ち、山有り河有り、杉や松をはじめその他多くの草木が生えていて、犬や馬、象や人も大古から居たものだ”動かざるもの山の如しと云う自然観を持っている人達がたくさん居られるので、地球や自然の動的把握についての基本的な認識の改革や、大陸移動説や、生物の分布との関係などについて話す事は非常に有意義であり、程んどのお母さん達は、「今度は上の子供を連れて来よう!!」と云われる方が多かった。

またお母さん達の多くは、子供から性に関する質問を受けたりする時、“どう返答してよいか、わからない”と云われる人が多かったので、子供の性教育について、確かな知識を親子で見学したり話を自由に聞けるように企画する事も必要なテーマではないかと思った。(同誌第11巻第1号昭和60年11月、P52~53前半 4.生命

の自己保存と種族保存の問題を参照)

第3の例として、一般社会人男性が散歩方々漫然と入館して来た場合を考えて見よう。

一般社会人、男性の場合は婦人層と関心や興味を示す点が異っていて、生命の発生などよりも個体の骨格の変化などに興味や関心を示す人が多かった。例えば、古生代末期から中生代にかけての地球の乾燥期に魚類が自分の生命をつなぐために干上がった池から他の水溜りに移動せざるを得なくなり、そのために鰭を使って体を持ち上げ、腹這いになって移動した。そのために鰭の付根に筋肉がついて太くなり腕の役割をした。シーラカンスはその一例であるが、一度陸上に上ったものが、後で再び海に戻り生き延びたために、現在でも時々、トロール船の網にかかって捕えられ、生きた化石として騒がれている。両棲類の手足はこう云った陸上に上った魚のヒレがとれて中の骨格が裸出したものである。両棲類では歩行用として手足は出来たものの、未だ非合理的な型で体に対し横向きに手足の骨格が出ているので、体重を支えて歩行するのに困難で、どうしても腹を地につけて体を引きずり腹這いの型で移動するものが多い。例えばイモリなど良い例である。ところが、爬虫類に進化するにつれ手足が体の下に向って真下から体重を垂直に支える型に進化した。これは体の重量を支えるのに合理的な変化である。したがって、両棲類の時よりも長時間の歩行に耐え得るようになって爬虫類は陸地の奥地まで上陸する事が出来るようになった。又両棲類の時は皮膚が体の水分の蒸発を防ぐ事が出来ないが、爬虫類では体の水分の蒸発防止のための粘膜を張ったために(後にそれが体の動きによって割れ爬虫類のウロコとなった)水辺を離れて完全に陸上生活をなし得るようになった。したがって陸上を一番先に制覇した爬虫類は敵対する他の生物も居ず多種多様に陸、海、空にわたって分化し、大型のものでは、20mから30mにも達するものが居たと云われ、陸上生物の最大限界にまで大型化した。(もっとも水中であれば、浮力の関係もあってもう少し大型にまで成長出来るが——)

歩行に関しては哺乳類に進化すると、より活潑になり、走ったり、木に登ったり、木の枝をつかんでぶら下ったり、手足の骨格も多様に進化している。と云う魚のヒレ、カエルの手足、爬虫類の手足、馬や猿、人の手足が相同器管であり、生活環境や必要に応じて異った進化をなしたものであると云うラマルクの用不要説などに著るしい興味を示す人が多かった。これも断片的な知識や興味をラマルクの用不要説と云う一つの法則にまで高める事の出来る良い展開方法の一例であった。

第4の例として極楽鳥の話なども面白い一つの例であった。

元々極楽鳥はカラスのような、何の装飾もない見映えのしない鳥であったものが次第に分化してゆくにつれオスが美しい派手な飾り羽根を持つようになり、名実共に極楽鳥にふさわしい姿となった。しかし最初のカラスのような時は、他の鳥と同じようにメスの巣作りの時はオスも一緒になって手伝い共同で子育てに専念するが、美しい羽根で体を飾り派手な姿になると一匹のオスが何匹ものメスを蓄えて、メスの巣作りには手伝いもせず、見向きもしなくなったそうです。いずこの世界もこう云う面は同じらしいですね。これも一種の動物界の自然の法則でしょう。とかとたづねると、一般社会の男性の入館者の中には胸に当る人達も居られるらしく、自分と共通の自然の法則を発見されて帰られる人もあったらしい。時にはこう云ったユーモアを混えて気を抜くのも解説を楽しく運んで行くには必要な事柄である。

又日常生活の中からヒントを得て、戦中戦後を体験した人々であれば殆んど人は知っている。鯨のさし身の血は何故あのように鮮血に染っているのか？”などよい疑問で水中に長時間もぐって生活している哺乳類の呼吸代謝についての学習の良いテーマとなった。陸上の哺乳類は、肺に70%~80%位の酸素を貯えて残りの20%~30%を筋肉の中に貯えているが、鯨のように水中で生活し、長時間水中にもぐって生活している哺乳類はこれが逆で肺には20%~30%の空気しか貯えていないのに比し、筋肉には70~80%の酸素を貯えている。そのために鯨の肉は他の魚や哺乳類の肉とは違って酸素の多い鮮血で満されていて、腐敗が遅く食べても美味しいものである。と云うように極めて日常の生活の中で見たり、体験している事をテーマに取り上げて学習し、自然の法則と結びつけて行くと、非常に興味深く関心を持たせて楽しく学習させ、よく理解せる事が出来て効果的であった。

男性、女性を問わず最も真面目に関心を持っているテーマに遺伝に関する事柄があるが、これは展示や図示などではなかなか完全な説明のつきにくいテーマであるため、フィルムを使ったり、専門的な講話が必要となって来る。

以上例示したように入館者の興味や関心のポイントを素早く見つけ出して学習を展開して行く事は、学習効果を高めるばかりでなく、ほんの散歩方々入館した人達にも、たま一度きりのつもりで来館した人達にも必ず再訪の意志を持たせる事が出来、博物館活用の機会を親子

家族、友人特で学ぶ機会を作るものとなった。又この要領は主婦や一般社会人のみならず、幼児、学童、学生、その他全ての入館者指導のために応用する事が出来る。よく小学生が夏休みを利用して博物館を見学したり学習に来る生徒達も多い。彼等は学校における授業と違って一定の定められた時間内で否応なく教師の指導により、教科書のテーマを学習するのではなく、自由な時間に、自分の好きなところを、実物や模型を見たり、さわったりしながら学習するのであるから、実に生々して観察したり、質問したりして来る。有る時は団体で入館した生徒でさえも「普段全く理科の授業などには興味を示した事の無い生徒が、こんなに関心を示し質問をしたのは初めてだ!!」と引卒の教師を驚かせた事もあった。特に小学校、中学校の児童、生徒は無限に伸びる芽を持っているので、それを自由に伸す意から、あくまでも成長や学習を側面から助ける意味で質問に答えたり、指導しなければならない。学術的解説をなすと言うよりは、児童や生徒に疑問を持たせ考えさせたり、自分で自然の法則や、生命の進化と適応についての現象を発見して行くように仕向け、学習の楽しさや、自然科学への興味を持つように指導するのが理想的である。また中には極めて少数ながら、小学校5.6年生であっても非常に熱心で博士のように詳しい知識を持った児童も居る。これ等英才児は学校の授業だけでは決して満足していないので、その発見と特殊な高度の指導方法を考える必要が有るのではないと思われる。

第5例、未就学児童、小学校生徒児童の見学について
4才頃から7.8才頃までに子供は感覚や知識の概念化が進み、事物を分類したり、関連付けたりすることも可能となって来るが、その際の推理や判断が、未だ直観作用に依存しているのが特色である。したがって物の形をとらえたり、素早く見分ける直観においては卓越した能力を持った直観的思考段階の時期である。したがってこの時期の幼児には博物館よりも動物園や植物園の方がより有意義であるが、博物館見学をさせるならば、展示品についての一つ一つの形や色、手ざわり硬さや大きさ、表面の特徴等を覚えさせるような見学をさせる。しかしこの年令では極めて自己中心的な考え方や、自分の周囲のものとの比較しか出来ないで、一番大きな動物は何か？一番小さなものは何か？相撲をとらせ一番強いのはどれか？走らせたならどれが一番早く走るか？と云うような比較や、ババと走らせたり、力くらべをすると、どちらが強いかなどで力や走る早さの感覚をつかませるような学習が適している。

7. 8才頃から11才頃になると空間的關係、大小關係、時間關係などの推理も簡単なものから可能になり、形式的推理力は急激に進歩する。もっとも、こうした認識の発達には、課題に適切な具体的操作を通じての解決とそうした操作に適切な言語化を通じて獲得されるのである。このように学童期の認識的思考は、具体的思考から抽象的思考へ発展し、自己中心性を脱却して客観的思考が可能になって来る。この年代、時期から本格的な博物館見学や学習指導が可能となって来る。小学校の低・中学年では機械的記憶が非常に優勢であるのに対し中学校頃から事物の意味や関連の理解による記憶が優勢になって来て、知的活動が抽象的な理論的思考に重点を置く方向へと著るしく発展を見せ、青年中期になるとそれが独自の発展を遂げ独立して動き出すようになる。この時期、中学校から高等学校にかけての博物館見学や学習指導が最も有意義であり、この時期の博物館における学習指導や感動はその学生生徒の一生をも左右するものとなるため極めて意義深く重大である事は以前にも記した事がある。この時期の指導要領については同誌第10巻1・2合併号、昭和60年3月、学校教育と博物館—自然科学博物館の学校教育における役割—で記したのでこれを参照していただく事にし、ここでは省略します。

第6例 高令者、老人層の見学について

入館者全体の中に占める比率は極めて低いが、老婦夫仲よく散歩方々見学に来館される場合も有り、ゆとりをもって実に楽しい見学をされ、解説者の説にも熱心に耳を傾けられる。老人層は人生の大半を終え、多くの経験を持っていられるので、解説の内容をよく理解され、展示品の一つ一つの資料についても非常に興味を示されるが、70才を越えると、やがて自分も自然に帰って行く運命にあるためか自然に対しこよなく愛着を抱いていられる方々が多い。したがって、自然の循環などについて極めて興味深く自然に受けとめて聞かれる。生命の崇高さや美しさ等についてもよく理解され、地球や生命の進化についても驚く程の理解を示される方が多い。

以上、いくつかの例をあげて婦人層、一般社会男性、学童、幼児、中・高校生、老人層などについての展示品の解説指導の有り方を記したが、このように入館者の興味や学習のポイントを見つけて解説指導を行う事によって短時間に効果的な学習を行う事が出来、「博物館へ来て良かった!!」と云う強い感銘を与え、一度きりのつもりで来た人々にも再訪の意欲を持たせ、更に同好会への入会の機会ともなすことが出来る。

B. 団体入館者のための解説指導

—前もって見学の目的、学習のポイントをたづねて、ガイドブックやパンフレットの準備をしておく—

博物館見学のために入館する団体には大体次のような種類の団体が有る。

1. 日本全国からの修学旅行者団体(小・中・高校)
2. 関東一園の学校の遠足(小・中・高校)
3. 学習を目的にした見学団体(P.T.Aや親子連れで土・日曜を利用した団体)
4. 一般社会人の団体
5. 外国人の団体 などがあります。

この中で学校団体である1.2の場合は、殆んど前もって入館の日時、人数、学校名などを知らせて来るため、見学の目的や内容についてくわしく聞いて準備し、切角遠方からの見学の機会を有効に使えるよう取計らわねばならない。

1の修学旅行団体は日本全国からの主に、中学校、高等学校の2学年、3学年の学生が大半で、時期的には5月が一番多く、入館時間も1時間位の予定で来る場合が多い。したがって、前もって引卒の教師および理科教師と連絡をとり、どの資料についての説明をするか? また、引卒の教師が説明するか? 博物館の学芸員によって行うか? についても決めておくといふ。中学校、高等学校の理科教科書内容に沿ったパンフレットを作成しておくようにする。しかしパンフレットは後で見る事も出来るので入館した時間は学芸員がアムモナイトや三葉虫の化石の展示されているところや、地層と示準化石の実物、模型、シーラカンス、タイラノザウルス、始祖鳥、ナウマン象の化石、類人猿などの教科書に出ている展示品を積極的に要領よく案内し解説した方がより効果的である。

地方にも科学博物館は有るが、何と云っても資料の豊富な事、系統的、学術的な展示が行きとどいている事においてはやはり国立科学博物館は立派であるから十分な見学、学習が出来るよう単品についての解説を行うと共に進化の歴史的展開、人間に進化する迄の生命の適応と時間的、空間的広がりについて、特に博物館の展示からは、生物の命がけの適応や進化の關係および生命の驚意や尊さの念が、はっきりと理解出来、自然界における人間の位置付等がよくわかるように展示されているので解説を補って人生の意義などについても理解して帰るよう解説学芸員は努力すべきである。何と云っても小、中・高校の場合は教科書の中に出ている写真や文字内容が博物館の資料や展示と一致し、「あゝ、これは教科書の何頁に出ていた!!」「これは博物館に展示されていた

ものと同じだ!!」「博物館の先生が説明していた事と同じだ!!」と云うように生徒の脳裏に深く焼き付いていて学校の授業の時折に出て来て、教師と生徒、又生徒同志で話し合ったり、パンフレットを開き直して活用するように指導する事が肝心である。こうなれば、おのづから学習に対する意欲が湧いて来て、スポンサーの云うところの「観察、実験にもとづいて直観に訴える学習から知識の学習に向って教授過程を進めるべきで、生徒を積極的な知識の探求者にすることを強調し、精神を文字の犠牲にするような教育をしりぞけるべきである」と云う主張にかなった教育となすことが出来極めて理想的である。このように学校教育の場合は特に展示品が視聴覚教育資料となる事と生命現象の時間的、空間的拡りを認識する事、自然史上における人間の位置付けや、生命の輝さを知り人間以外の自然や生命に対しても博愛の念を抱いたり、生命を取り巻く自然環境との相関関係を把握し、環境問題、公害、自然保護、エネルギー問題、天然資源の有意な活用に積極的に取り組む態度を養うよう、高学年になるに従って高度の認識を把握するような基礎学習をさせるよう指導せねばならない。

2.3. の関東一園の学校の遠足や博物館見学を目的にした団体の場合、これら団体にはしっかりした引卒の先生が付いていられる上に、時間も、2時間から3時間位の十分なゆとりを持って入館していられるので一番解説し易く学習効果も大きい。これら団体は日曜、土曜、祝祭日の休日を利用して来館される場合が多く、引卒の教師と協力しながら、学芸員の説明が難しい時は教師が間に入ってよりわかり易く、噛砕いて生徒に説明したりされるので、小学校の5.6年生のクラスでも展示品を見せながらかなり深い高度のところまで学習指導が出来て一番理想的な見学、学習形態と云える。小学校5.6年生になると自然科学に対する興味も関心も深くなるので、出来る事なら関東一園の小学校高学年、中学校全部、こう云った形式で見学していただきたいと思う。そのため時には、忌憚ない飛んでもない質問が出たりして大爆笑が起こることもあるが、見学者の人数や関心の度合、質問内容などを考えてどの程度の解説をするか？はその時に応じた学芸員の判断にまかされている。

4.5 の団体の場合は前記のお母さん、一般社会男性の場合を参考にした解説を行うが、時々一般社会団体の中には、農林、水産省などの催しや研修に出席するために集った地方の中堅者層の団体等も有り、当てい解説者などの解説では間に合はない高度の専門家団体も有る。こう云った場合は、研究部の学芸員に連絡して応援を依頼

した方が無難である。

海外からの団体は、観光旅行団体よりは国際学会等で来日した外国人学者の団体や国際協力事業団の招きで日本に研修に来た研修生と云った人々が多く殆んど学術的解説を必要としない場合が多い。

しかし在日外国人の幼稚園、小・中学校の生徒の団体も時々来館する場合も有る。この場合は、生徒に直接解説しても良いが、引卒の教師に展示内容を解説し、教師から再び生徒に解説してもらうような方法を取る事が一番効果的であった。

4. 心理面からの要点

A. 入館者の関心を展示品からそらさないようにしてリードして行く技術

これは解説者にとって一番難しい技術である。教師をなさった経験を持たれている方には、よく御理解出来る事と思いますが、一時間以上の授業を生徒の注意をそらさないように自分に引つけて話を進めて行く事はかなり難しい事で、話術、相手との呼吸、人格的魅力など多くの事柄が要求されて来る。学校教育の場合であれば、関心をそらせている生徒に対して注意したり、時には立たせたり、叱責する事も可能であるが、博物館見学の場合においては決して強制する事が許されず、常に相手の興味を引出しつゝリードして行かねばならないので特に難しい。これにはいくつかの要素がある。

第1に、相手に対し暖かい印象を与える事が肝要である。このためにはマイナスの要素を持った陰湿な人柄は不向きである。

第2に話術にたけ、難しい学術的内容を相手に親しみ易い言葉でわかり易く楽しく話せる人でなければならない。

時々解説学芸員の中にはラテン語の学名を混えてベラベラとやっている人も居るが、これは害多い解説で聞く人に威圧を与えたり、いたづらに難しく感じさせるものでありさけた方がよい。

第3に、自分の解説内容に自信を持って話す、誰も自分の解説する事に自信の無い態度であれば決して聞くわけがない。展示品全部に自信を持つ事は大変であるから、どの部分からでも良い。毎日研究を重ねて自信を持つように努力し積み重ねなければならない。

第4に、質問を受けて十分に答えられなかった点は直ちに学習して次の人には正しく答えられるような習慣を身につけるようにすればおのづと自信がついて来る。

第5に 入館者に対応する時は常に新鮮な感じを与え

よ、そのためには展示品の一つでもよい、毎日新しい勉強をして入館者に新しい知識を与えられるように心の準備をしなければならない。これら、第3.第4.第5の自信と誠意、喜びは必らず入館者に伝わり次第に話が持続するようになる。これらの態度は人生全般にわたっても云える事かも知れないが、特に解説者は誠心誠意、熱意、喜びなどの解説者の人格の切り与えとなる仕事である事を心得、絶えざる努力が必要である。

第6に 出来るだけ文字や本からよりも体験によって得る知識や認識学習を積み、

よく、小・中学生に、自然科学に対する興味を持たせるには「偉人の伝記を読ませよ、」と云われている。偉人の伝記は単なる小説ではなく、実際に人が行った実録であり、ドキュメントのみが持つところの迫心力が有りそれが人の心を打つからである。実際に行った体験談は表現や形式はまづとも人の心を打ち、深い感銘を与えるものを持っている。したがって展示品解説者は、出来るだけ、実際の体験に基いた知識の習得をするように心掛けなければならない。

第7に 学習者と自分を接近させよ、相手より少し詳しい程度に調子を合せ、決して相手より高飛車に出たり、押しつけがましい解説をしないよう注意が必要である。学習者より下位に自分を置き、学習者を押し上げるような気持で、学習者と展示との対話を一層深めるような解説を行なう方法が相手に柔かく受入れられる。

第8に よくなされる質問のプログラムを作り、それに対する十分な解答が出来るよう準備しておく。

第9に 学習者の要望に応じた解説者を作成するよう研究部学芸員との連携を密にしてお互に協力し合って解説の内容を高めて行くような態勢を常に整えておく。

以上のように展示品解説者は、常に研究と実践と反省のたえ間無い丹念な積み重ねによってはじめて上達するものであるから、一つの独立した専門の分野として養成がなされても良いのではないと思われる。

特に今後、海外における展覧会や外国人入館者の多い東京国立博物館等では、更に二ヶ国語以上の語学力や、比較文化的な面での知識、日本文化の特質や、各時代の文化の特色や、国民性について自由に話したり、各国の文化事情についても理解出来る国際性も要求されて来るので、非常に高度な研究と資質が要請される分野となる。

かつて高名な有る館長が「博物館は指輪みたいな存在だよ!!」とおっしゃったそうである。適格な表現かどうかはわからないが、博物館も指輪も確かにエコノミックアニマルを脱した一定以上の経済力と文化の香りのする

ところにしか存在しない事だけは確かだろう。博物館の歴史が王公、貴族の収集した珍品や美術品に始まっている事からも、高度の文化的存在である事に間違いない。したがってこれら博物館学芸員も経済や政治をはるかに超越した文化や教養の香り高い人間性を涵養し、博物館に集収された資料から導き出される情報や知識(資料の持つ顕在価値)を一般の人々に還元して行くよう努力しなければならない。

教育学的研究や、十分な心理学的考察よりも筆者の体験談に終わってしまい、内容的に見て必らずしも正しい立派な論文とは云い難いが、博物館の第2の専門的役割である。「もの(展示資料)と人との結びつけに関する調査研究」と云う意味から、何らかのお役に立てたいだけではないかと思ひ、また博物館では極めて大切な分野であるにもかかわらず未だ殆んど手が着けられずに放置されたまゝの状態であるため何等かの手がかりとなるように提出させていたゞきました。

参 考 引 用 文 献

- | | | |
|----------|---------|---|
| 樋口 清之 | } 1980, | こんなに役立つ博物館、全般にわたって |
| 加藤 有次 | | |
| 古賀 忠通 | } 1978, | 館種別博物館の教育普及活動と設備施設 博物館学講座, Vol.18 P.175, P.181, P.248～249 |
| 徳川 宗敬 | | |
| 樋口 清之 | | |
| 鈴木 敦省 | } 1983, | スベンサーの教育目的論、新教育原論 |
| 岡本 色治 | | |
| 藤永 保 | 1966, | 直感的思考段階・具体的操作段階、児童心理学, P.251 |
| 杉田千鶴子 | } 1982, | 高令化社会と生涯教育、人間の成長をひき出すもの・さまたげるもの-子どもと親生徒と教師の心理学-P.308, その他 |
| 島 久洋 | | |
| 沢田 慶輔 | } 1972, | 児童期の心理の特徴、青年期の心理の特徴、第2章発達心理、教育心理, P.18～23 |
| 小口 忠彦 | | |
| 日本社会教育学会 | } 1974, | 専門的職務は何か-博物館学芸員-社会教育職員論, P.223～229 |
| 小林 文人 | | |